



Title	芥川龍之介『酒虫』論
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	阪大近代文学研究. 2007, 5, p. 12-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92644
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

芥川龍之介『酒虫』論

水野 亜紀子

一、問題の所在

芥川龍之介の『酒虫』は大正五年六月、第四次『新思潮』第一年第四号に発表された。この作品は、怪奇や伝説に富む物語を集めた中国の伝奇小説集『聊齋志異』巻十四「酒虫」⁽¹⁾を素材として書かれている。作品の末尾には、酒虫を吐き出した劉のその後の零落をめぐる「三つの答」⁽²⁾が並ぶ。「第一の答。酒虫は、劉の福であつて、劉の病ではない」、「第二の答。酒虫は、劉の病であつて、劉の福ではない」、「第三の答。酒虫は、劉の病でもなければ、劉の福でもない。(中略)劉は即酒虫、酒虫は即劉である」⁽³⁾がそれである。その「三つの答」の後には次のように書かれる。

これらの答の中で、どれが、最よく、当を得てゐるか、それは自分にもわからない。自分は、唯、支那の小説家の Didacticism に倣つて、かう云ふ道徳的な判断を、この話の最後に、列挙して見たまでゝある。

「三つの答」は、それぞれが実は「第一が原話にあるもの、第二が但明倫による新評、第三が芥川によるもの」⁽⁴⁾であることが、先行研究においてすでに明らかにされている。「第三の答」は芥川自身が付け加えたものであるが、広瀬朝光氏は「この三つの答の、どれが正しいのか、その判断は読者に任せているわけで、芥川は蛇足として自分の意見を付け加えたのである」⁽⁵⁾と論じる。

従来論では、「三つの答」の是非の判断が読者に任されているとし中国の教訓主義に倣うのだとする末尾の文章が、あえて問題とされることはなかった。しかし、『酒虫』の結びは本文に「支那の小説家の Didacticism に倣つて」とあるように、中国の教訓主義に倣つたものなのだろうか。また、その「三つの答」の判断は読者に任されているのだろうか。本論では作品の末尾を新たに問い直し、『聊齋志異』の「酒虫」を下敷きにして創作されたこの作品の主題について考察したい。

二、「三つの答」を導く姿勢

『酒虫』の末尾に「三つの答」が挙げられる直前には、次のようにある。

酒虫を吐いて以来、何故、劉の健康が衰へたか。何故、家産が傾いたか——酒虫を吐いたと云ふ事と、劉のその後の零落とを、因果の關係に並べて見る以上、これは、誰にでも起りやすい疑問である。現にこの疑問は、長山に住んでゐる、あらゆる職業の人人によつて繰返され、且、それらの人人の口から、あらゆる種類の答を与へられた。今、ここに挙げる三つの答も、実はその中から、最、代表的なものを選んだのに過ぎない。

「三つの答」が作品の末尾に置かれるまでの経緯が「あらゆる職業の人人によつて繰返され、且、それらの人人の口から、あらゆる種類の答を与へられた」「その中から、最、代表的なものを選んだのに過ぎない」と説明される。先に述べたように「三つの答」のうち「第一の答」は原典に付された評、「第二の答」は但明倫の評である。この二つは「支那の小説家」が教訓を説話末に付加する形式そのままに掲げられる。芥川が付加した「第三の答」もまたその形式に倣うかに見える。だが、ここで注目したいのは、「第一の答」と「第二の答」を踏襲したうえで芥川自身の答を付加し「三つの答」と

するにあたり、先の引用傍線部のように「何故」という言葉が用いられていることである。「三つの答」は「何故」という疑問の後に提出される。芥川は原典（『酒虫』）に取材する内容に対して疑問を投げかけ、その疑問自体を作中に示しているのだ。これは『酒虫』にのみ見られる創作方法であろうか。

原典の内容に対し（何故）と疑問を提示する様子は、他作品においても確認することができる。『さまよへる猶太人』では、「イエス・クリストの呪を負つて、最後の審判の来る日を待ちながら、永久に漂浪を続けてゐる猶太人」をめぐる伝説が語られるが、その中で語り手は、その伝説を伝えることと自体が目的ではないと断りを入れる。「自分は、この伝説的な人物に関して、嘗て自分が懐いてゐた二つの疑問を挙げ、その疑問が先頃偶然自分の手で発見された古文書によつて、二つながら解決された事を公表したのである」と述べるのだ。語り手は次のように疑問を提示している。

・第一の疑問は、完く事実上の問題である。「さまよへる猶太人」は、殆どあらゆる基督教国に、姿を現した。それなら、彼は日本にも渡来した事がありはしないか。

（『さまよへる猶太人』）

・第二の疑問は、第一の疑問に比べると、聊その趣を異にしてゐる。「さまよへる猶太人」は、イエス・クリストに非礼を行った為に、永久に地上をさまよはなければな

らない運命を背負はせられた。(中略)それが何故、彼ひとりクリストの呪を負つたのであらう。或はこの「何故」には、どう云ふ解釈が与へられてゐるのであらう。

『さまよへる猶太人』

この後、伝説的な人物である「さまよへる猶太人」の記録の中の記述が語り手の疑問の答になるものとして引用される。

「自分は、今この覚え書の内容を大体に亘つて、紹介すると共に、二三、原文を引用して、上記の疑問の氷解した喜びを、読者とひとしく味ひたいと思ふ」という語りが示すように、疑問を掲載してその答を導くことの意義も説明されている。

また、『三つのなぜ』は、各節が「何故」という問いかけを示すタイトルを持つ小説である。疑問は歴史上の人物や先行する作品の登場人物に対してそれぞれ投げかけられる。

「(一)なぜファウストは悪魔に出会つたか?」「(二)なぜソロモンはシバの女王とたつた一度しか会はなかつたか?」

「(三)なぜロビンソンは猿を飼つたか?」というタイトルのものと共に、よく知られた題材を扱い、新たな側面から光を当てることで思いがけない意味を引き出そうとしている。芥川はそうした方法によつて新しい作品を創作する。

ほんの一例ではあるが、『酒虫』のような結びの体裁をとらない作品であっても『酒虫』と同様に参照する原典へ「何故」と疑問が示されているものを見てきた。芥川の作品に見られる「何故」という問いかけは、既によく知られ意味がわ

かつて見えるかに見える題材に、もう一度疑問符を付けていく姿勢の表れであると考えられる。それらの作品は原典に対して「何故」と問いかけることを原動力として成立する。芥川の「何故」は原典から新たな意味を引き出し、同時に、新たな読みの可能性を提示する方法となっている。『酒虫』の末尾は、その形式から、中国の小説家の Didacticism に倣つて教訓を付しているように見える。しかし、発想の手順をみると、そうとばかりは言えない。「何故」という問いかけは、よく知られた題材とその解釈に何かを付け加えるものではなく、既成の解釈に対して根本から疑問を投げかけるものである。そのため、形式こそ中国の教訓主義に倣っているが、その内実は異なる。「第一の答」「第二の答」は酒虫が劉にとつて「福」であるか「病」であるかと評価するものに過ぎないが、「何故」に対する「答」、特に芥川の創作である「第三の答」は、既成の知識や考え方が用意する枠に当てはめることで導き出されるようなものではない。後に説くように、「第三の答」をこれら二つの教訓と同レベルのものとする事はできない。

『酒虫』の終わりは「答」を一つにはしげばらず、読者に判断を委ねているように見える。こうしたスタンスを取る作品は他にいくつも見られる。『黄梁夢』を例にとつてみよう。作中には「生きる」と云ふ事は、あなたの見た夢といくらも変つてゐるものではありません。これであなたの人生の執着も、

少しは熱がさめたでせう」という呂翁の科白と「夢だから、猶生きたいのです。あの夢のさめたやうに、この夢もさめる時が来るでせう。その時が来るまでの間、私は真に生きたと云へる程生きたいのです。あなたはさう思ひませんか」という盧生の返答がある。作品の最後は、「呂翁は顔をしかめた儘、然りとも否とも答へなかつた」と結ばれる。呂翁と盧生の二人の考え方が提出されるものの、是非の決着ははっきりとつけられていないのである。

いま一つの例を『伝吉の敵打ち』に見よう。この作品は原典を引用するかのようには書かれているが、芥川の全くの創作である。作中では伝吉の仇討ちに関する様々な点について「諸説」があるとされている。一部を引用しよう。

伝吉は下男部屋に起臥しながら仇打ちの工夫を凝らしつづけた。この仇打の工夫に就いても、諸説のいづれが正しいかは少時疑問に附する外はない。

(一)「旅硯」、「農家義人伝」等によれば、伝吉は仇の誰であるかを知つてゐたことになつてゐる。(中略)

(二)「農家義人伝」、「本朝姑妄聴」(著者不明)等によれば、伝吉の剣法を学んだ師匠は平井左門と云ふ浪人である。(三)「伝吉の敵打ち」

「諸説」が並列されており、結論を出すことを目的としない書き方となっている。結末では仇討ちについて正確ないきさつを示すかのように書かれるが、そこまでを読み進めてきた

読者にはそれが果たして正確なものかと疑わせるようなものになつてゐる。この他、『さまよへる猶太人』では「この答の可否を穿鑿する必要は、暫くない。兎も角も答を得たと云ふ事が、それだけで既に自分を満足させてくれるからである」とされ、『神神の微笑』では「やがては我我の事業が、断定を与ふべき問題である」とされている。語り手は必ずしも読者に「答」の選択を強要しない。『藪の中』は作品自体がそれを物語つてゐる例であると言えよう。どの視点による説明もそれなりに納得できる意味を持つが、同時に全ての視点が相対化されているため、どれが本当でどれが嘘あるいは間違いないのかわからない。複数の語りを用意することにより意味の不確かさをあぶり出している作品である。『羅生門』の末尾は、初出稿である帝国文学版(大正四年十一月刊)では「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盜を働きに急ぎつゝあつた」となつてゐるが、春陽堂版(大正七年七月刊)では「下人の行方は、誰も知らない」と結末をぼかす形に改変されてゐる。そのように下人の行方を明示せず、末尾の読みを読者に委ねるところには、確固たる答はないとする芥川の意識をうかがうことができる。このように見ていくと、芥川は必ずしも小説の結末において結論を一定方向へ意味付ける作家ではないと言えるかもしれない。

ただ、作品の結末に対する意識の高いことには留意すべきだろう。例えば『少年』の一節は、そのことを示している。

尤も今日の保吉は話の体裁を整へる為にもつと小説の結末らしい結末をつけることも困難ではない。たとへば話を終る前に、かう云ふ敷衍をつけ加へるのである。

——「保吉は母との問答の中にもう一つ重大な発見をした。それは誰も代赭色の海には、——人生に横はる代赭色の海にも目をつぶり易いと云ふことである。」

けれどもこれは事実ではない。のみならず満潮は大森の海にも青い色の浪を立たせてある。すると現実とは代赭色の海か、それとも亦青い色の海か？所詮は我我のリアリズムも甚だ当にならぬと云ふ外はない。かたがた保吉は前のやうな無技巧に話を終ることにした。が、話の体裁は？——芸術は諸君の云ふやうに何よりもまづ内容である。形容などはどうでも差支へない。『少年』

ここでは「結末らしい結末」を付けて作品を閉じることで小説としての体裁を整える仕方もあると述べる。結末を付けて体裁を整えることをしていないこの作品の中にあつて、このやうに述べていることは、逆に芥川の末尾の形式に対する意識の高さを証明するものとなつてゐる。

『酒虫』の末尾形式は意図的に選ばれたものであろう。しかし、末尾の文章をそのままに受け取つて「三つの答」のうちからどれを取るか読者に判断を委ねられてゐると理解するのは当を得ていない。『酒虫』では、「何故」という問いに対して挙げられた「三つの答」のうち、芥川の創作した「第三

の答」にこそ大きな意味が与えられている。「第三の答」の意味するものが他の二つと異なる質のものであることを明らかにするため、以下で『酒虫』の本文全体を分析していきたい。

三、『酒虫』のオリジナリティ

『酒虫』は「一」から「四」の四章で成り立つ。

近年にない暑さである。どこを見ても、泥で固めた家々の屋根瓦が、鉛のやうに鈍く日の光を反射して、その下に懸けてある燕の巣さへ、この塩梅では中にゐる雛や卵を、そのまゝ蒸殺してしまふかと思はれる。まして、畑と云ふ畑は、麻でも黍でも、皆、土いきれにぐつたりと頭をさげて、何一つ、青いなりに、萎れてゐないものはない。その畑の上に見える空も、この頃の温気の中であつたせいか、地上に近い大気は、晴れながら、どんよりと濁つて、その所々に、霰を焙烙で煎つたやうな、形ばかりの雲の峰が、つぶつぶと浮かんでゐる。

このように本文は情景を見たまに語るやうな書き方で始められる。「近年にない暑さ」や「この頃の温気」という表現からはその場の感じさえ伝わってくる。こういった細かな描写は原典には見られない。語り手自身がその場において見たままを語るテレビのレポーターのやうな書き方となつてゐる。

「酒虫」の話は、この陽気に、わざ／＼炎天の打麦場へ出てゐる、三人の男で始まるのである」という一文の後もこの語り方が続くが、そこでは次の傍線部のような表現を見逃すことができない。

不思議な事に、その中の一人は、素裸で、仰向けに地面へ寝ころんでゐる。おまけに、どう云ふ訳だか、細引で、手も足もぐる／＼巻にされてゐる。が格別当人は、それを苦に病んでゐる容子もない。背の低い、血色の好い、どことなく鈍重と云ふ感じを起させる、豚のやうに肥つた男である。それから手ごろな素焼の瓶が一つ、この男の枕もとに置いてあるが、これも中に何がはいつてゐるのだけか、わからない。

もう一人は、黄色い法衣を着て、耳に小さな青銅の環をさげた、一見、象貌の奇古な沙門である。皮膚の色が並はづれて黒い上に、髪や鬚の縮れてゐる所を見ると、どうも葱嶺の西からでも来た人間らしい。

ここでは目前に展開する状況が、事情が飲み込めないままに語られている。故意にこのような書き方をするので読み手の関心を惹いているように見える。しかし、そこには関心を惹く以上のねらいがあるのではないだろうかと考えられる。もう少し先を見ていこう。

さうして、その三人が又、関帝廟に安置してある、泥塑の像のやうに沈黙を守つてゐる。……

勿論、日本の話ではない。——支那の長山と云ふ所に
ある劉氏の打麦場で、或年の夏、起つた出来事である。
これは「二」の章の最後である。ここに六ポイントを付すこと
で、この後さらに話が展開することが暗に示されている。
しかし、ここで一旦、打麦場の場面は終えられてゐる。「二」
の章に入ると、これまでのスタンスとは異なり、語り手は説
明口調となる。

裸で、炎天に寝ころんでゐるのは、この打麦場の主人で、
姓は劉、名は大成と云ふ、長山では、屈指の素封家の一
人である。

さらに次のような表現を確認することもできる。

それも、「独酌する毎に輒、一壺を尽す」と云ふのだから、
人並をはづれた酒量である。尤も前にも云つたやう
に、「負郭の田三百畝、半は黍を種う」と云ふので、飲
の為に家産が累はされるやうな惧は、万々ない。

鉤括弧を付して原文を引用したかのように書くことによつて、「酒虫」の話」を忠実に語ろうとすることが示されている。ただし「それが、何故、裸で、炎天に寝ころんでゐるか」と云ふと、それには、かう云ふ因縁がある」という一文の後からは書き振りが変化する。「因縁」は語り手の説明口調によつて紹介されるのではなく、『聊齋志異』の本文に拠りながらもそこにはない詳細な描写が加えられることで再現されているのである。「劉が、裸で、炎天の打麦場にねころんで

ゐるのには、かう云ふ謂れが、あるのである」という箇所までその再現は続く。「二」の章は「一」の章と同じ時間と場所が設定されているため、「因縁」が再現される。「二」の章が終わるとそこから作中の時間が再び動き出すことになる。

ここで注目したいのは、「二」の章が唐突とも思える「学校の教育」への言及で終わっていることである。

酒虫と云ふ物が、どんな物だか、それが腹の中にゐなくならず、どうなるのだか、枕もとにある酒の瓶は、何にするつもりなのだか、それを知つてゐるのは、蛮僧の外に一人もない。かう云ふと、何も知らずに、炎天へ裸で出てゐる劉は、甚、迂闊なやうに思はれるが、普通の人間が、学校の教育などを受けるのも、実は大抵、これと同じやうな事をしてゐるのである。

傍線部のように「学校の教育」という言葉がここで出されることは不自然に見える。しかし「学校の教育」についての言及は、「二」の章において目前の状況を、何が起こっているのか理解できないままに語る語り手が登場することや、原典の展開の順序を変えて突然打表場の場面から始められること⁶⁾と、連動していると読むことができないだろうか。原典になり「孫先生」がこの作品において付加的に設定されていることが、この問題を解く鍵となるだろう。

孫先生について、先行研究では「原話では劉と僧侶の当事者間の話し合いのみで治療が実施に移されているが、芥川は

これに第三者である傍観者、即ち孫先生（儒者）を宛てて、事の真偽のほどを明らかにしようと努めている」⁷⁾と解釈されている。原典にない孫先生を登場させた意義は、果して、事の真偽のほどを明らかにするためだろうか。そのことを考えるうえで、孫先生という登場人物が付加されることによつて、蛮僧の突然の来訪に対する劉と孫先生の態度が対比的に描かれる点に注意すべきだろう。本文の表現からこの様子を見てみよう。劉は「小供らしい虚栄心」から蛮僧を迎えるが、挨拶もしなければ口もきかない蛮僧に対して「不安」を抱く。一方、孫先生はというと「まるで、取り合ふ容子はない」。酒虫という言葉を聞くと、劉は「思はず覚束なさうな声を出した。さうして、自分でそれを恥ぢた」。ここで孫先生は「酒虫と云ふ語の興味に動かされ」ている。しかし、蛮僧が無愛想なので「自分が莫迦にされたやうな氣」がして「内心、こんな横柄な坊主に会つたり何ぞする主人の劉を、莫迦げてゐると思ひ出した」。ここに明らかな二つの反応の対比が見てとれる。劉は無批判であり迂闊な反応をするが、孫先生は面子にこだわつて新しい出来事に向き合おうとしていない。孫先生は、自分の理解の外にあることに對しては受け入れようとする姿勢を示さない。「白い鳥の羽で製つた団扇」を大事そうに使う儒者である彼は「道仏の二教を殆、無理由に輕蔑してゐる」。孫先生は自分の知識の範囲内でしか物事を考え

ない狭量な人物として設定されているのである。そういえば、

孫先生は「頭の先に、鼠の尻尾のやうな髻を、申訳だけに生やして、踵が隠れる程長い白布衫に、結目をだらしなく垂らした茶褐帯と云ふ袴へ」と描写されており、尊敬に値する人物として描かれてはいない。彼が初めに酒虫という語に興味を持った理由も、自分の腹の中にそれがいないかと「不安」になったからである。

横柄な態度の蛮僧は「この界限では、評判が高い」「殆ど奇蹟に近い噂が盛に行はれてゐる」人物であるが、劉と孫先生は蛮僧について噂に聞くのみである。その二人が突然「背の高い、紫石稜のやうな眼をした、異形な沙門」と説明される蛮僧の訪問を受け、聞いたこともない酒虫の存在を知らされる。こうして二人は未知の状況に置かれるのだ。原典にはない孫先生を設定することによって、未知の状況に対する二つの反応が同時に示されている。劉と孫先生のやりとりは、先行研究の指摘のように事の真偽を明らかにするというよりは、未知の状況に対する二人の反応を相対化して示そうとするものであると考えられる。孫先生は絶対的な目を持つようには描かれていない。この小説は「一」の章でレポーターのやうな語りを採用され、その場の状況が事情が飲み込めないままに説明される。そのため劉と孫先生の置かれた状況が彼ら自身にとつても未知のものであり、同時に読み手にも未知のものとなる。読み手にその状況に置かれた時の心持ちを諒解させることで、劉と孫先生の置かれた状況を体験すること

ができるように仕立てられているのだ。さらに、何も知らずに言われるままに従うと説明されるものとして「学校の教育」という言葉を持ち出す「二」の章の終わりが読み手に受け入れられやすくなり、説得力を持つてくる。そのように見ると、唐突にも見える「学校の教育」への言及は、ここまでの展開と密接なつながりを持つことがわかる。芥川の『酒虫』は、『聊齋志異』に載せる「酒虫」の物語を紹介することが目的ではない。「酒虫」の物語を紹介することが目的であれば、原典通りの話の流れの方がわかりやすい。「一」の章における語りをあえて全知の視点にしない芥川は、あくまでこの原典を素材としながら独自の主題を持った小説を創作しようとしている。

ところで、『酒虫』の「学校の教育」が、芥川の他作品の言説と呼応する点も見逃せない。

・彼の眼に映じた一般世間は、実行に終始するのが特色だった。或は実行するのに先立つて、信じてかゝるのが特色だった。が、彼は持つて生れた性格と今日まで受けた教育とに煩はされて、とうの昔に大切な信ずると云ふ機能を失つてゐた。〔路上〕

・教師は皆個人としては悪人ではなかつたに違ひなかつた。しかし「教育上の責任」は——殊に生徒を処罰する権利はおのづから彼等を暴君にした。彼等は彼等の偏見を生徒の心へ種痘する為には如何なる手段をも選ばなかつた。

つた。(『大導寺信輔の半生』)

『路上』では、所与のものとしての性格と並んで教育が力を持つことが書かれる。「煩はされて」「失つてゐた」という表現からは教育に対して批判的であることがわかる。『大導寺信輔の半生』では、教育を受ける側の生徒が受け身であり、無抵抗であることが印象付けられる。

「学校の教育」への言及に関わつて次に注目する点は、他作品においても芥川が小説内で唐突に話を一般化させていることである。

・誘惑に勝つたと思ふ時にも、人間は存外、負けてゐる事がありはしないだらうか。(『煙草と悪魔』)

・独り貉ばかりではない。我々にとつて、すべてであると云ふ事は、畢竟するに唯あると信ずる事にすぎないのではないか。(『貉』)

・罪を罪と知るものには、総じて罰と贖ひとが、ひとつに天から下るものでござる。(『さまよへる猶太人』)

・しかし、芸術の士にとつて、虱の如く見る可きものは、独り女体の美しさばかりではない。(『女体』)

・範実「それもどうかかわらないね。一体我我人間は、如何なる因果か知らないが、互に傷け合はないでは、一刻も生きてはゐられないものだよ。唯平中は我我よりも、余計に世間を苦しませてゐる。この点は、ああ云ふ天才には、やむを得ない運命だね。」(『好色』)

芥川の小説においては、話を唐突に一般化させることは稀なことではないようである。

ここで『酒虫』本文に戻ると、「三」の章は「一」の章と同じ打麦場の場面に設定されていることがわかる。「一」の章はレポーターのような語り方であるが、「三」の章は次のようになっている。

暑い。額へ汗がぢりぢりと湧いて来て、それが玉になつたかと思ふと、つうつと生暖く、眼の方へ流れて来る。生憎、細引でしぼられてゐるから、手を出して拭ふ訳には、勿論行かない。そこで、首を動かして、汗の進路を変へやうとすると、その途端に、はげしく眩暈がしさうな気がしたので、残念ながら、この計画も亦、見合せの事にした。

ここでは語り手が、劉の置かれた状況や彼の心情に極めて近いところに視点を置いて説明する。劉の視線からの表現や、劉の感覚を示した表現も入り込んでいる。別の箇所には「しかし、これは、後になつて考へて見ると、まだ苦しくない方の部だつたのである」という表現も見られる。語り手は劉の置かれた状況とそれに対する彼の反応、気持ちの変化を全て知るため、少し後から振り返るような表現をしているのである。そうして最後の章である「四」の章は、「今年で、酒虫を吐いてから、三年になるが」と、全くの後日談として語られる。そこでは「今は、匂を嗅ぐのも、嫌だと云ふ」「一年

の中に、何度、床につくか、わからない位ださうである」など伝聞の表現が見られる。「四」の章では語り手が全知の立場から離脱することによって「三つの答」を掲げる末尾になりむ立場へと変わっているのである。

四、芥川の「答」

『酒虫』には、例えば孫先生のように芥川によって付け加えられた設定があるが、削除された箇所もある。削除された内容もまた『酒虫』を考えるには問題として取り上げなければならぬ。そこで削除された内容を次に簡単に示す。

- ・酒虫が出てきた後、劉が蛮僧に対して金で酬いようとしたこと
- ・蛮僧は金を受け取らず、ただ酒虫をいただきたいと言ったこと
- ・酒虫は酒の精であり、水の中にこの虫を入れてかき回すと美酒ができること
- ・劉の目の前で試しにやってみると、本当に美酒ができたこと

この削除について、先行研究においては「原話の第二話の後半部分（劉驚訝。酬以金。不受。但乞其虫。問將何用。曰。此酒之精。甕中貯水。入虫攪之。即成佳釀。劉使試之。果然。）は、何故か芥川の「酒虫」には用いられていない。話の内容

があまりにも荒唐無稽なため、恐らく芥川はこの部分を小説の中に書き加えるのを割愛したのであろう」という推測がなされている。しかし削除の行為には他の意図が働いているのではないかと考えられる。この部分の削除によって、原典のテーマが崩されているからである。原典には、異人である蛮僧が酒虫に関する知識を持ち酒虫の価値を知ることが書かれる。この部分の削除は単なる割愛とは言えない。

ここで指摘しておきたいことは、原典にある「僧愚之以成其術」を、芥川が「僧愚ニシテ以テ其ノ術ヲ成ス」として「暗愚の蛮僧」と解釈していることである。本文の「第一の答」の箇所にも「暗愚の蛮僧」の表現が見られるのである。芥川は『聊齋志異』の「番僧」を胡人の僧として捉え『酒虫』に描いている。石田幹之助氏が『長安の春』^⑩所収の「西域の商胡、重価を以て宝物を求めると」^⑪「再び胡人探宝譚に就いて」「胡人買宝譚補遺」で述べるように、西域からやって来た胡人は、中国人の知らない知識を持つと捉えられていた。その方面の知識に暗い中国人から胡人が価値のある物を買取することを話題にした説話は多く存在する。それらを参考にする^⑫と、『聊齋志異』は「胡人買宝譚」にあたる^⑬と考えられる。『聊齋志異』の僧は愚かではないし、原文そのものも「僧、之ヲ愚トシテ、以テ其ノ術ヲ成ス」という意味であつて、僧を愚かであるとは書いていない。芥川は原典の持つ「胡人買宝譚」に深入りをせず、芥川の読みのもとでこの話を取り上げてい

る。

では、芥川は原典のテーマを崩してまで何を書こうとしたのだろうか。「四」の章において、語り手が「三つの答」を並べるのに向け、全知の立場から離れていることは既に指摘した。「三つの答」は「Dialecticism に倣つて」並べたと言うが、この作品では「学校の教育」を否定的に捉えている。そうすると、「Dialecticism に倣つて」という言葉には皮肉が含まれているのではないだろうか。『酒虫』の中で、芥川は「Dialecticism」のレベルでの解釈では真実はわからないとし、一義的な因果関係において、あるいは意味として固定する方向において、物事を解釈することを退けているとは考えられないだろうか。芥川の創作である「第三の答」は、他の二つの「答」とは内容の質を異にする。

第三の答。酒虫は、劉の病でもなければ、劉の福でもない。劉は、昔から酒ばかり飲んでゐた。劉の一生から酒を除けば、後には、何も残らない。して見ると、劉は即酒虫、酒虫は即劉である。だから、劉が酒虫を去つたのは自ら己を殺したのも同前である。つまり、酒が飲めなくなつた日から、劉は劉にして、劉ではない。劉自身が既になくなつてゐたとしたら、昔日の劉の健康なり家庭なりが、失はれたのも、至極、当然な話であらう。

この「答」は、既成の価値の体系において認められていない一義的な解答を導き出そうとしているのではない。他の二つの

「答」のように、酒虫が劉にとつて「福」であるのか「病」であるのかといった判断を下すことを目的としてはいないのである。「三つの答」を掲げる直前に作中で投げかけられている「何故」という問いは、人間の存在の根底につながる根源的な問いであると言える。(人間とは何か)(人間が生きているとはどういうことか)を問うのである。「第三の答」において「劉は即酒虫、酒虫は即劉である」とする芥川は、(人は虫である)と答えている。読者に対し、既成の理解を退けて根源的な問い直しを促すような「答」を提出しているのだ。謎めいたその「答」は、読者に自らの答を模索し能動的にその答の持つ問題に関わることを求めているのである。

注

(1) 清の蒲松齡著、十七世紀後半成立

(2) 関口安義他編『芥川龍之介全作品事典』(勉誠出版、二〇〇〇)。「第一の答」に相当する箇所は次の通りである。

異史氏曰：『日尽一石，無損其富；不飲一斗，適以益貧；豈飲啄固有数乎？或言：「虫是劉之福，非劉之病，僧愚之以成其術。」然歟否歟？』

そして、「第二の答」となつた但明倫の評は次の通りである。

嘗見有酒力初不甚佳，而嗜飲無度；其繼也，日飲石余，而不見其醉；試再投之，竟成無底之壑矣。擬以此進之而不果，其人亦不久而死矣。可知劉之虫，其病也，非福也。

この引用は張友鶴輯校『聊齋志異 会校会注会評本(中)』(中華書局、一九六二)に拠る。

(3) 広瀬朝光「芥川「酒虫」の文芸性」(『愛知大学国文学』一九七六・三)

(4) 『羅生門』の末尾の一文は何度も改訂が行われている。関口安義氏は『鼻』(春陽堂、大正七年七月)収録本文に見られる大幅な改訂について次のように指摘する。「これによってテクストには空白が生じ、読者の参与がいつそう加わる余地が生まれた。つまり下人の行方は読者一人ひとりの〈読み〉にゆだねられることになったのである」(関口安義『芥川龍之介とその時代』筑摩書房、一九九九)

(5) 山田有策氏は、樋口一葉『たけくらべ』(『文学界』明治二十八年一月〜明治二十九年一月)の語り手が作品冒頭において「町のたはずまいや霧囲気を読者に伝えるいわばリポーターとして登場している」と述べる。「たけくらべ」の語り手』『深層の近代―鏡花と一葉』おうふう、二〇〇二)

(6) 原典では①劉の紹介、②僧が劉に酒虫のことを指摘する、③僧の治療、という順に話が進められるが、芥川の『酒虫』は僧の治療の場面から始まる。

(7) 広瀬朝光、前掲論文

(8) 教育に対するこの懐疑的な扱いに、森鷗外『妄想』(『三田文学』明治四十四年三月〜四月)の一節が反映している可能性を指摘したい。学問に齷齪する自分を「舞台監督」の指示に従って動くだけの「役者」だと述べ内省する点にそれを見出す。出原隆俊先生の御教示による。

(9) 広瀬朝光、前掲論文

(10) 石田幹之助『長安の春』(平凡社、一九八八)

【付記】本文の引用は全て『芥川龍之介全集』(岩波書店、一九九五〜一九九六)に拠った。全ての引用について、漢字は適宜通行の字体に改め、ルビは省略した。傍線は全て論者の付したものである。

(みずのあきこ／本学大学院博士後期課程)